井の頭自然文化園開園 70 周年記念
「わたしと井の頭自然文化園」エッセイ

ジュニア賞：市川澄

リスはすごい

ぼくが動物園をおとずれるたびに思うことがある。それは、そこにいる動物たちはみんなそれぞれの得意技を持っているということだ。

友だち二人と、ぼくと、ぼくの母で井の頭自然文化園に行ったことがある。リスの小径を歩いていると、たくさんのリスたちがちょこまかと走り回っていた。しばらく観察することにして、リスの動きを目で追っていると、一匹のリスがクルミをくわえて走っているのが見えた。ぼくがリスの動きに合わせて歩きだしたことに、友人たちも気づいてぼくの見ているリスを追った。リスは、出口から少しはなれた所に生えている木に登り、クルミを割ることにしたらしい。カリカリ・・・カリカリ、カリカリカリ・・・・・・五分たってもクルミは割れない。

「もう、次のを見に行こうか。」と、ひとりの友だちがいった。しかし、努力し続けるリスの姿を見て何か感じたらしく、「まあいいや。」といって再びそのリスに目をやった。

他のリスにクルミをとられそうになったり、鮮やかな手つきでクルミを回しながらけずったりして、ぼくの時計で十五分がたった。その時、ついにそのリスはクルミを割った。そして、中の実を取り出して食べた。

ぼくは、リスの行動を観察して、感じたことが二つある。

一つ目は、リスの得意技はクルミ割りで、そのために努力が必要だということ。

二つ目は、ぼくたちはリスの努力を見ていたということだ。クルミが割れる割れないではない。ただその努力する様子を見ていた。その結果、クルミは割れ、ぼくたちは満足した気持ちでリスの小径を出た。

人間は、努力して見返りを求めようとするけれど、大切なのは努力で見返りではない。だからこそぼくたちは、リスの努力をじっくりと見て、結果が出るとすぐに立ち去ったのだ。

ぼくらは帰り際に集まって休憩した。それぞれ気になった動物とそのニックネームを挙げた。ぼくらはそろってリスと言い、別行動をしていた母だけはマーラといった。

リスのニックネームは「ながい（クルミを割るのに時間がかかったから）「がんばりや」「くるみわりっち」だった。

手間をかけて割ったクルミはおいしかっただろうな、くるみわりっち。